

「使い捨て食器を減らすためにできること」

— ささやかな環境保護活動 —

皆さんは環境保護のため、程度の差こそあれ脱プラスチック活動に取り組んでおられるだろう。筆者も最近では地元のコンビニやスーパーにはマイバッグ持参で出かけ、会社のランチに購入する弁当もレジ袋なし、お手拭きなしで受け取るなどささやかな努力を重ねている。それでも毎朝コンビニで購入するコーヒーのカップの蓋部分やミルクの容器はプラスチック製で気になっていた。そして本日（2019年5月27日）からアマゾンで購入した350ml用ポットでコーヒーを持参することにした！

廃プラスチック輸入大国の中国が2017年末で輸入を禁止、その受け皿となった東南アジア諸国も輸入削減に踏み切り始めるなど、最大の廃プラ輸出国である米国や我が国は極めて困難な状況に直面している。廃プラ輸入の目的は輸入国での再利用であるが、今や自国で消費されるプラスチック製品の処理がままならず、環境への悪影響が顕著なことがその背景にある。実はインドも廃プラ輸入国だ。インドでは年間1,300万トンのプラスチックが消費されるが、そのうちリサイクルされるのはわずか400万トンと言われる。毎年900万トンが廃プラとして捨てられる計算だ。この原因はゴミの分別不備と不十分な廃プラ回収能力とされている。だから廃プラリサイクル業者は輸入廃プラを使うことになる。この悪循環を打開すべくインド政府は2015年に廃プラ（特にペットボトル）の輸入を禁止した。廃プラ業者がやむなく国内リサイクルの改善に乗り出すと考えたからだ。にも拘らずペットボトル廃プラの輸入量は、2016年度に12,000トン、2017年度に48,000トンと急増し、2018年度は第一四半期だけで25,000トン輸入されたという。その原因は2016年に特別経済区（Special Economic Zones）の代理店による廃プラ輸入は禁輸の対象外とする措置が採られたからだとされる。このルートが抜け穴として利用されているようだ。よって国内消費されるプラスチックの再利用拡大も思うように進まないという深刻な事態だ。（政府は2019年3月6日、上記の例外措置も廃止して廃プラの完全禁輸を発表した。発効日は不明）

こうした中、身近なところで廃プラ削減に取り組む組織（企業）が多数ある。本稿ではそのうち4つの取組例を紹介したい。（出所：The Better India 他）

1. 「レンタル食器」

Bengaluru市食器のレンタル（Rent-A-Cutlery¹）を営む「Soil and Health」は、ゴミの誤った処理を改めようと2016年に創設された社会事業だ。直径30センチの皿、スプーン、カップ、タンブラー（大小）のセットは24時間の貸出で、レンタル料が15ルピー（約24円）

¹ Cutleryは食器類、特に銀製のナイフやフォークなどのこと。

(ただし輸送費・税別)。祭式、誕生パーティー、小規模な地域社会行事、会社行事、自宅の集まりなどに利用されている。食器類は自家製の柑橘果皮バイオ酵素洗剤でエコ洗浄される。

「Soil and Health」は主として地元コミュニティに対するゴミや落ち葉の堆肥化指導を行っている。創始者の Vasuki Iyenga 氏は廃棄物管理のスペシャリストで、「Refuse, Reduce, Reuse, Recycle」をモットーにしているそうだ。

2. 「お皿バンク (Plate Bank)」

Adamyia Chetana は 2016 年に Bengaluru で登録された非営利事業。要はこちらも食器の貸出事業であるが、その仕組みが少々ユニーク。ステンレス製の皿、スプーン、コップを 1 万セット有する Adamyia Chetana は、レンタル料を一切徴収しない。

代わりにユーザーはレンタルの都度、食器代相当の小切手を預託する必要がある。食器を損傷なしに返却すれば小切手も返ってくる。損壊があれば修理代が差し引かれることになる。元化学肥料相の Ananth Kumar 氏 (昨年死去) の母で、貧困層や恵まれない人々の救済に半生を捧げた Girija Shastry さんを偲んで創立された Adamyia Chetana は「Food, Education, Health」をメインテーマに様々な慈善事業を行っており、「お皿バンク」はそのほんの一部である。

3. Spill Savers

Bengalulu 市に住む二人の友人、Pooja と Shalini は以前からしばしば同市のゴミ問題について意見交換をしていたという。使い捨て食器を使う場合、一回のホームパーティーで排出されるゴミの量はその家の 1 か月分のゴミに等しい。

またこうしたゴミはきちんと分別されることなく捨てられることが多いため、プラスチック、紙、生ゴミが一緒くたにされて埋立地に捨てられてしまう。Bengalulu 郊外の埋立地に廃棄されるゴミは毎日 4,000 トンに上る。

自分たちがどうしたら環境保護に協力できるかを思考していた二人はここに焦点を当て、パーティーの食器類一式の貸出サービス会社、「Spill Savers」を立ち上げた。「売り」は、パーティー後の汚れた食器をそのまま引取り、洗浄するところまで引受けるところだ。パーティーの主催者は、食器洗いという手間を嫌って使い捨てプラスチック食器を選択しがちだからだ。

「Spill Savers」とは、食器がシンクから溢れる (Spill) のを救うもの (Savers) という意味なのだろう。気になる料金は、食器 1 人前セットが 55 ルピー、20 人用のパッケージなら 1,000 ルピーである。布製ナプキンも 1 枚 3 ルピーで付けられる。利用しない手はないわけである。Spill Savers は宣伝・広告を一切行わなかったが、そのサービスは口コミのみで広がったという。

4. 「みんなの食器バンク (Crockery Bank for Everyone)」

Haryana 州、Gurugram (旧グルガオン) に住み、役所の監査部に勤務する Sameera Satija さんは、食事会用のステンレス製食器を市民に無料で貸し出している。

プラスチック製使い捨て食器の使用を減らし、市内のプラスチックゴミの山をこれ以上大き

くしないようにするのが活動の趣旨だ。きっかけはある飲料の配給所でプラスチックコップが使われ、1度の使用で破棄されるのを目撃したことだ。こうした状況は他の慈善活動の場でも同様だった。

プラスチックゴミによる環境汚染を減らすにはステンレス製食器の使用が望ましいが、配給所にそれを求めるのは現実的ではないと考え、食器レンタルを思い付いた。Sameeraさんはプラスチックのコップやプレートを生産するメーカーを訪れ、コップ1つを作るのにコップ1杯分の水が使われると知った際もショックを受けたという（水は貴重品だ）。自身もポケットマネーから10,000ルピーを拠出して、グラスとプレートそれぞれ100個、小皿75個をそろえ「銀行」を設立した。食器数はすぐに400を超え、賛同する団体からの寄付もありその数は増え続けているようだ。レンタル申請はCrockery Bank for EveryoneのFacebookからできる。

紹介したそれぞれの活動は地味で小規模には違いないが、こうした取り組み・仕組みが一般市民の意識改革の呼び水となりインド都市部を中心に伝播してゆくことが期待される。我が国でも、例えばリユース食器を使ったバーベキューセットのレンタルといったエコ重視の取り組みも普及しつつあるようだが、何よりも身近な家庭、職場内における環境保護に各人が真剣に取り組んでいきたいものだ。

—了—

本レポートは情報提供のみを目的として作成したものであり、何らの行動を勧誘するものではありません。
ご利用に関しては、すべてお客さまご自身でご判断くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。
本レポートは信頼できると思われる情報に基づいて作成していますが、当行はその正確性を保証するものではありません。
本レポートのご利用によりお客さまがいかなる損失、損害を受けられても当行は一切の責任を負いません。
本レポートはお客さま限りでご利用くださいますようお願いいたします。